

第 12 回動物用インフルエンザワクチン国内製造用株選定委員会の議事概要
(平成 30 年 5 月 9 日開催)

1. 出席委員

北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター統括 喜田宏 (委員長)
東京大学名誉教授 明石博臣 (副委員長)
鳥取大学教授 伊藤壽啓
動物衛生研究部門領域長 西藤岳彦
東京大学名誉教授 山田章雄
日本中央競馬会防疫課長 山中隆史

2. 議題

(1) 鳥インフルエンザワクチン

- ① 高病原性鳥インフルエンザの発生状況について
- ② 平成 29 年度に国内で発生した高病原性鳥インフルエンザのウイルスの性状について
- ③ 国内製造用株の変更の要否

(2) 馬インフルエンザワクチン

- ① OIE 馬インフルエンザ専門家委員会の概要
- ② 海外の馬インフルエンザの流行状況と動物検疫所分離株 (2017 年)の性状
- ③ 国内製造用株の変更の要否

(3) その他

- ① 国内の豚インフルエンザウイルス (IAV-S) の状況

3. 概要

(1) 鳥インフルエンザワクチン

2018 年 1 月に香川県で分離された高病原性鳥インフルエンザウイルス A/chicken/Kagawa/1T-1/2018(H5N6)株 (以下「香川株」という。)と Vac-1 株 (現ワクチン製造用株) について、交差 HI 試験を実施したところ、HI 価の差が 16 倍であった。このことから、現時点ではワクチン製造用株の変更は不要との結論となった。

また、備蓄ワクチンを鶏に接種し、攻撃試験を実施した結果、備蓄ワクチンは香川株による発症を阻止 (生残率 100 %) し、ウイルス排泄を抑制した。このことから現時点ではワクチン製造用株の変更は不要で

あることが確認された。

なお、現行の手順については、科学的な検証を行うとともに、必要に応じて見直しを行うことが提言された。

(2) 馬インフルエンザワクチン

現行のワクチン製造用株は世界の流行株の抗原性状に近く、OIE の推奨株にも合致していることから、世界の流行株に対して有効であると考えられるため、現時点ではワクチン製造用株の変更は不要との結論となった。

なお、フロリダ亜系統クレード1のうち Q189K のアミノ酸置換を持つウイルスについては、今後、米国での流行の主流になるかを注視する必要があるとの提言があった。

(3) その他

国内の豚インフルエンザウイルス (IAV-S) の状況について報告が行われた。